

「葛飾柴又の文化的景観」ニュース

受け継がれてきた柴又の伝統行事「神獅子舞」（その2）

毎年10月、鎮守・柴又八幡神社の例大祭で奉納される神獅子舞。区指定無形民俗文化財であるこの伝統行事は、柴又の方々によって大切に受け継がれてきました。お師匠さんと呼ばれるベテランの経験者の方や現役の舞い手の方々が、神獅子舞にどのような思いを持ち、どのように関わってこられたのか、お話をお聞かせいただきました。

◆高木茂氏（柴又八幡神社獅子係世話役総代）

神獅子舞を始めたのは10歳です。45歳で引退しましたが、これまで演じた回数は50回を超えています。きっかけは近所に住む神獅子舞のお師匠さんに誘われたことです。当時は舞い手だけで50～60人、その内、子どもだけでも20人以上いましたから、今よりずっと多かったです。多くは地元の農家の方々に、商店街の方もいました。私が子どもの頃の練習は本当にきつかったですよ。今は練習期間が7日間ありますが、昔は5日間しかありませんでした。当時は夜中の2時頃までやっていて、本番1日前ともなると、帰宅できるのは朝8時です。そのため、学校では授業中に居眠りをしてしまい先生に怒られました。お師匠さん達も、皆厳しかったです。それでも神獅子舞に参加して一番良かったことは友人が増えたことです。神獅子舞を通じてできた友人とは、今でも年中集まって話をし、月1回お酒を飲んでいます。

現在は、昔のように厳しい稽古はやらなくなりました。私も以前は指導をしていましたが、20年前から若手の皆さんにお任せして、黙って練習を見守っています。また、2年程前からになりますが、本番1週間前の練習に加えて、5月から9月までの5ヶ月間、月に1回集まって練習を行うようになりました。若手の方々が主体となって、子ども達に太鼓の叩き方などを一生懸命指導してくれています。

責任総代を務めて10年になりますが、舞い手が段々と少なくなっていることが課題です。子ども達に神獅子舞に参加してもらうため、自治会の掲示板に募集の貼り紙をしていますが、毎年、1人か2人、入ってきてくれれば良いほうです。この伝統行事をこれからもずっと継承していくためにどうしたら良いのか、とても難しい課題です。

◆石渡久祐氏（柴又八幡神社獅子係世話役）

10歳から60歳まで神獅子舞を演じてきました。これまでに舞を演じた回数は200回以上になります。初めて舞台上に立ったのも小学3年生の時です。最初は献饌(けんせん)の舞(1番目の演目。御前舞とも呼ばれる。)で小獅子を演じました。納めの舞である太刀(たち)の舞の大獅子は8回位やりました。多くの回数を演じてきましたが、自分で納得できたことは一度もありません。

神獅子舞を通して学んだのは体の動きですね。太刀の舞の大獅子は、しっかりと腰を落として、ペタッと床に座らないといけない。これができないと良い踊りができないんです。元々、体は柔らかい方ですが、こればかりは難しいです。

20歳の頃には、神獅子舞だけでなく、囃子もやりました。囃子の練習は、神獅子舞とは別の日にやっていて、夜の7時半から9時頃まで、神社の境内に丸太を並べて、太鼓を叩く練習をしていました。当時は練習後に神社の横にあった天ぷら屋さんで天ぷらを食べるのが恒例になっていて、飽きるほど食べました。その後も約5年間、神獅子舞と囃子の両方をやっていたのですが、「お前はどっちの人間なんだ」と言われてしまい、囃子はやめました。

神獅子舞を引退後は、猿田彦の役を約20年務めました。例大祭当日に神事が行われる社殿を警護するため、三匹獅子が社殿の周りを3周するのですが、それを先導するのが猿田彦の役目です。猿田彦は特に決まりがないので自己流です。最後、笛の音でピタッと止まらないといけないので、タイミングが難しいんです。

現在も神獅子舞の練習で指導することもあります。私達がやってきた方法を正確に伝えるのは難しいですね。これからも自分達と同じように指導し、昔のままの神獅子舞の伝統を守り伝えていってほしいです。



高木茂氏



石渡久祐氏

◆湯浅照彦氏（舞い手指導）

初めて神獅子舞に参加したのは10歳です。元々、親が八幡神社のお神輿の手伝いをしており、神社の会合の場で「舞い手がいない」という話があったようです。母親から「お前、獅子舞行ってくるか」と言われて、参加することになりました。

練習がきついという感覚はなかったです。人数も少なく、みんな仲良くやっていたね。ただ、練習の時間が長く、夜の11時や12時過ぎまでやっていました。その頃は、練習が5日間しかなかったんです。今みたいに動画を見て、自分で勉強することができない時代でしたから、色々な動作を次から次に、ずっと指導してもらうので、とても時間がかかりました。最終日は、納めの舞である「太刀の舞」の練習と決まっていた、夜中の1時頃まで練習していましたね。

全ての舞を経験しましたが、一番印象深いのは、やはり太刀の舞です。太刀の舞の大獅子を初めて務めたのは29歳の時です。その年の稽古初日に、それまで大獅子を担当していた先輩から、急に任された形でした。心の準備ができておらず、あまりのプレッシャーで例大祭前日に熱を出してしまいました。それだけの大役なんです。何とかやり遂げましたが、先輩達からは散々な評価でした。その後も約15年間、太刀の舞の大獅子を務めました。50歳で神獅子舞を引退しましたが、太刀の舞をいつかもう一度例大祭の舞台上でやりたいです。

神獅子舞は地域の子供達も社会を学ぶ場にもなっています。例大祭当日は、子供達が周りを見て、自分で動けるように声掛けをしています。自分達もそうやって学んできました。そして大人になった子供達はきっと、社会に出ると、すぐく目や耳の効く人物になれると思っています。

◆熱田瞬氏（舞い手）

神獅子舞は9歳から始めました。剣道の先生が神獅子舞をやっていて、誘っていただいたことがきっかけです。これまで全ての舞を経験しました。今年は太刀の舞の中獅子を務めました。神獅子舞の伝統は、私が子どもの頃から変わりません。昔は例大祭の日に、境内に屋台が多く出店していました。一時期なくなってしまいましたが、最近は地元の有志がお店を出すようになり、また賑やかになったと思います。

神獅子舞の練習は、毎年、本番の1週間前の土曜日からスタートして金曜日まで行われます。笛は25年間、先輩方と一緒に稽古をする中で身に付けました。笛を覚えるのは大変でしたが、子どもの頃からの憧れだったので、当時、一生懸命練習した感覚が残っています。現在は子供達の指導もしています。神獅子舞の練習場という小さな社会を通して、子供達がマナーを守るというような社会勉強の場になるように心がけています。息子と一緒に神獅子舞に取り組むのが楽しいので、これからも親子で出られたらと思っています。

◆熱田湊人さん（舞い手）

父に誘われて神獅子舞を9歳から始めました。昨年からはじめたばかりなので、演目はまだ3つしか舞っていません。今回は2回目でしたが、獅子頭を被って40分近く舞を演じて、楽しかったので、来年も続けていきたいです。



湯浅照彦氏



舞い手指導をする湯浅氏



例大祭当日の熱田さん親子



熱田瞬氏



太鼓の練習をする湊人さん



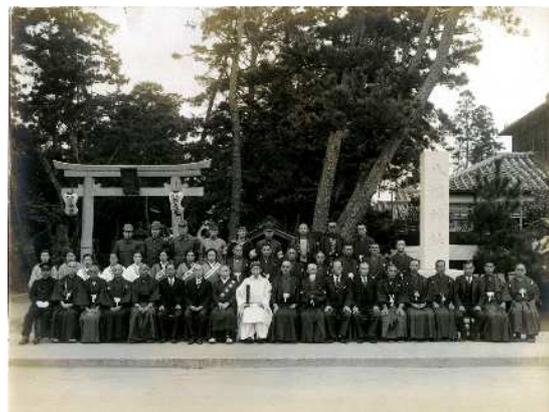
太刀の舞(右手前が湊人さん・右奥が瞬さん)

【取材後記】 舞い手を何年も務めてこられたお師匠さんから、始めたばかりの小学生の舞い手まで、幅広い世代の方々にお話をお伺いしました。子どもの頃から仲間と切磋琢磨しながら稽古に取り組まれてきた皆さんのお話からは、神獅子舞を舞うことの難しさとともに、先人から継承された神獅子舞を懸命に修得し、柴又の歴史と伝統文化を後世に繋いでいこうとする強い責任感と誇りを感じました。また、幅広い年齢層の方が同じ目的を持ってひとつの場所に会えるこの場を、世代を越えたかけがえのない交流の場として、そして、地域の子供達を地域で守り育てていく場として大切にされていらっしゃることをお伺いし、人情のまちと称される柴又の人と人の繋がりや絆の深さ、温かさは、こうした所から育まれてきたのだと感じました。長期間にわたり取材にご協力いただいた皆様に改めて感謝申し上げます。

柴又における戦争の記憶 戸室 義一氏

2025年は第2次世界大戦終結80年となる節目の年。葛飾柴又にも、山本亭の地下防空壕が保存されているなど、戦争の記憶が刻まれています。今回は、第2次世界大戦中に少年時代を過ごした戸室義一氏に戦時中のご記憶をお聞かせいただき、昭和100年、戦後80年に思いを馳せる機会にしたいと思います。

◆**太平洋戦争開戦当時** 私は昭和9年(1934)生まれなので、太平洋戦争が始まった昭和16年(1941)は小学校2年生でした。当時、家の近くに原っぱがあって、そこに同じ小学校の友人が集まって、鬼ごっこやチャンバラをしてよく遊んでいました。戦争が始まった当初は、まさに勝利ムードです。「日本は強いんだ、日本は強いんだ」と。一度、小学校で提灯行列をやった記憶があります。戦死した英霊が帰ってくるということで、柴又小学校の校長と生徒全員で柴又駅に行き、英霊をお出迎えしました。また、これは私の父から聞いた話ですが、兵隊になる検査に受かって出征する時には、柴又八幡神社の例大祭で神獅子舞か囃子のどちらかをやるのが、柴又に住む男子の義務になっていたそうです。要するに武運長久、死なないで帰って来いということです。私の父も兵隊に出る時には、神獅子舞を奉納したそうです。



柴又八幡神社での出征写真(個人蔵)

◆**空襲の記憶** 柴又では、昭和19年(1944)の11月から空襲が本格的に始まりました。昭和20年(1945)の2月には、焼夷弾が落ちて死んだ人達を、帝釈天に筵を敷いて並べていました。近所の家では爆弾が防空壕に直撃しました。その時、私は自分の家の防空壕に入っていたので、もし爆弾があつて50m手前に落ちていたら、私がいた防空壕を直撃していました。そんな状況でも当時は怖いとは思わなかったんです。戦争とはこういうものだと思っていました。学校で毎日そう教わっていましたからね。



戸室家の防空壕があった場所(中央の木の下辺り)

これはおかしいと思い始めたのは、昭和20年3月9日から10日の早朝にかけて起きた東京大空襲のときです。3月9日の夜に隣のおばあちゃんに起こされたことを覚えています。「義一さん、大変ですよ」と。外に出て、ちょうど家から南西方向を見ると、もう真っ赤というか、照明灯で明かりをつけたように燃えているんです。あれを見た時に、「ああ、日本はもう戦争に負ける。大本営の発表なんか信用できないな」と思いました。当時小学校5年生だったので、それくらいの判断がついたんですね。だけど日本が負けるなんて言ったら、「大変だぞ。憲兵に連れていかれるぞ」って親に怒られますから。

私がかつとびっくりしたのは、次の日の朝のことです。柴又街道を溢れんばかりの人が歩いて行きます。どこへ行くあてもなく、歩いているというより、後ろの人に押されて、前へ進んでいるという感じでした。どこから来たのかは分かりませんが、きっと江東区や江戸川区、遠くは隅田川の東の辺りから、空襲の中を必死に逃げてきたのでしょう。泥水を頭から被ったようにドロドロで、頭はモジャモジャになって、ただ生きているだけというような状態でした。あれを見た時は、気の毒とか可哀想とかいうより、なんでこんな戦争をやるんだよと腹立たしくなりました。あの光景は決して忘れません。戦争は絶対にやってはいけない。でもあの日の光景を見た人は、もう柴又では私くらいかもしれませんね。当時、同年代だった人達の多くは、学童疎開で柴又にはいませんでしたから。

◆**学童疎開** 学童疎開には、集団疎開と縁故疎開の2種類がありました。集団疎開は、小学3年生以上の生徒が対象です。私が通っていた柴又小学校の生徒たちは、新潟県東頸城郡浦河原村(現・新潟県上越市浦川原地区)へ疎開しました。私は松戸市中矢切に母の実家があり、「矢切じゃ疎開にならない」と先生に言われましたが、なんとか拝み倒して、そこへ疎開しました。疎開先の矢切小学校には5年生の1学期だけ通いました。あの頃は、学校へ行ったら出席をとるだけで、あとは軍歌を歌って、高等科(中学生)の子たちは朝から夕方まで教練、私たち小学5年生以上の子たちは食糧増産に駆り出されました。江戸川堤防の中段を畑にしたり、田んぼの周りの青草を刈って堆肥にしたりするんです。当時は籠屋さんという職業があって、小学生用に籠を作ってくれるのですが、その籠に、刈った草を先生が「もっと入る」と言ってぎゅうぎゅうに押し込むんです。それを堆肥にして軍に納めます。矢切小学校はそれで表彰されたんですよ。そうした作業自体はつらいというより楽しかったです。

1学期が終わり、夏休みになると、すぐに柴又の家に帰ってきたので、8月15日の玉音放送は柴又の自分の家で聞きました。あの時は、本当にほっとした気持ちでした。「ああ、これで手足を伸ばしてゆっくり寝られる」と、そう思いました。

柴又の歴史と文化を皆で守る

1月23日(金)、帝釈天題経寺で行われた文化財防火デーの消防演習は、ルンビニー幼稚園の園児をはじめ、多くの方々が見学に訪れる中、帝釈堂で火災が発生したという想定で行われました。白い煙が上がると、帝釈天題経寺の自衛消防隊が火災を発見し、「帝釈堂が火事だー！」と、大きな声で参道商店会などへ火災の発生を知らせ、文化財の運び出しや消防署への通報、初期消火を行い、続いて柴又自治会の方々による消火器を使った消火活動が行われました。訓練とは思えない緊張感と各団体の連携に、見学している方々も、皆、かたずをのんで見守りました。演習のクライマックスには、一日消防署長に任命された双子のタレント「はんなみいな」のお二人による指揮のもと、柴又神明会消火隊、金町消防署の消防隊、金町消防団による一斉放水が行われました。

一日消防署長を務めたお二人のうち、妹の美奈(みいな)さんは閉会のスピーチで、「地域が一丸となって柴又を火災から守ろうとされており、私達も防火・防災意識をさらに深めていきたいと思います。」とお話されました。



神明会消火隊・消防署・消防団の一斉放水



柴又自治会による消火器による消火活動

柴又の人たちの明るい笑顔に包まれる場所

12月1日(月)、新柴又駅前広場で「イルミネーションの点灯式」が行われました。近所の方や東柴又小学校の児童など、たくさんの方が見守る中、カウントダウンの掛け声のもと、明かりが点灯されました。東柴又小学校ダンス部の児童による元気なダンスも披露され、イルミネーションに照らされた広場がたくさんの明るい笑顔で包まれました。

今年で10年目の節目を迎えた本イベントは、新柴又駅や柴又をイルミネーションで綺麗にしていこうという「光のプロジェクト」の一環として行われているもので、柴又自治会の有志の方々によって立ち上げられました。プロジェクトのメンバーは約20人。この日に向け、毎年9月頃から準備を始めます。電気店さんとの調整や開催許可の手続き、チラシのポスティング等、全ての準備をメンバーがボランティアで行います。1年目は1本の木から始まりましたが、年々電球の数を増やし、色を変えるなどの工夫を重ね、グレードアップを図っています。東柴又小学校ダンス部によるダンス披露も初回から行われてきました。

プロジェクト会長の齊藤幸雄氏は「このイルミネーションは、柴又のまちを盛り上げたいという思いでやっています。準備は大変ですが、お母さんと小さいお子さんがイルミネーションの写真を撮っている姿などを見ると、やって良かったなと思います。東柴又小学校の子ども達にとってもダンスを披露する場となっていて、親御さん達もたくさん見に来てくれます。この場所に人が集まって、喜んでもらえれば、それが一番です」と話してくださいました。



イルミネーション点灯式の様子

ご注意ください

「葛飾柴又の文化的景観」の選定範囲内で工事等を行う際、協議や届出等が必要な場合があります。

- **柴又まちなみ景観ガイドライン** (特定非営利活動法人柴又まちなみ協議会)
柴又6丁目の一部・7丁目の一部において建築・改修等工事を行う場合
- **葛飾区景観地区条例等** (葛飾区都市計画課)
柴又地域景観地区内で建築物や工作物の新築、新設、外観の変更等を行う場合
- **重要文化的景観に係る選定及び届出等に関する規則** (葛飾区生涯学習課)
重要な構成要素がき損した場合や工事等を行う場合



「文化的景観ニュース」のバックナンバーのほか、「葛飾柴又の文化的景観整備計画」や「文化的景観パンフレット」を、上記の二次元バーコードよりご覧いただけます。

【お問合せはコチラ】 葛飾区教育委員会事務局生涯学習課文化的景観係

〒124-8555 葛飾区立石5-13-1 TEL 03-5654-8477 FAX 03-5698-1541